

初句が、うまい。

氷室見しことなければ七十年氷室饅頭食べぬ年なし
坂本朝子

金沢では七月一日に「氷室饅頭」を食べる。かつて、加賀藩前田家が毎年七月一日に、氷室に貯蔵した雪水を幕府へ献上した。道中の無事を祈って神社に饅頭を供えたのが由来だという。

二十一世紀の日本人で「氷室」を見たことがある人などほとんどいないだろう。そして、人間の一生を基準とする時間感覚から見ても、とても大きく大きな「七十年」という数字が、この一首にやわらかなユーモアをもたらしているようだ。

崩れたる家屋の前で恐怖心分かち合うよう話す人増ゆ
中川弘子

余震が長くつづく熊本の住民の「今」をクローズアップした一首。「恐怖心分かち合うよう」がうまい。お互いにならずき合っている中年女性の立ち話が目にうかぶようだ。

静もれる職員室の空気割き内示受くべく我は進みぬ
蓬田真弓

「内示」は、転勤の内示だということが今月号の他の歌から分かる。「空気割き」、感じとしてよく分かる。ここが一首の核心である。が、「我は進みぬ」は、場面が職員室にしてはやや大げさな感じがすると思うが、いかが？

姫沙羅のまだらに肌を着替へをり 山の初夏奥行き

深む

荒井公子

ヒメシヤラの幹肌に注目した一首。ヒメシヤラは、シラカバ、アオギリとともに三大美幹と呼ばれていると読んだことがある。幹が美しい木なのだ。

そのヒメシヤラを主役にすえての季節歌。結句がうまい。「奥行き深む」は、ヒメシヤラの木が人を誘うような感じで、山の奥の方までつづいて見えている感じを的確に表現している。

講演に酒詠む歌を多く挙げ濃醇に語る晋樹隆彦
佐藤博之

晋樹隆彦への讃歌。大阪での講演に取材しているようだ。「濃醇」という語が、酒にも晋樹隆彦にも、両方にひびくようになっていく構成がポイント。

吟行の人は往来よりはすれいちょうの由来読みはじめたり
藤島秀憲

「吟行の人」はたまたま見かけた俳句吟行の人だろう。短歌の世界ではほとんどやらないが、俳句ではいまでも吟行がさかんに行われている。珍しい事物を見るような、好奇心にみちた視線が主題。

はつなつの野球中継九州の出身選手をしきりに映す
鈴木陽美

取材感覚のユニークさに感心した。ここしばらくの間、新聞歌壇の投稿歌等で、じつに多くの熊本地震にかかわる短歌を見てきた。この欄にもすでに二首引用した。しかし、こういうかたちで熊本地震に光を当てた短歌ははじめて見た。プロ野球ファンの作者ならではの。